

## ジッドにおける「ディスポニビリティ」の概念

森井, 良  
早稲田大学大学院文学学術院 : 博士後期課程

<https://doi.org/10.15017/1563575>

---

出版情報 : Stella. 34, pp.273-287, 2015-12-18. 九州大学フランス語フランス文学研究会  
バージョン :  
権利関係 :

# ジッドにおける「デイスポニビリテ」の概念

森 井 良

## 1. ジッド的デイスポニビリテ

アンドレ・ジッドが「デイスポニビリテ disponibilité」の概念を自身の思想に導入したことはよく知られている。『地の糧』（1897年）では「魂」のデイスポニビリテとして、その最良の体現者メナルクの言葉で次のように説明されていた——「私の魂は交差点にむかって門戸をひらく宿屋だった。入ってきたいものが、入ってきた。私は柔軟になり、協調的になり、自らのあらゆる感覚によって自由自在となり、注意深くなり、もはや個人的な思想などひとつも持たないまでに聞き役となり […], そして、ごく些細な反応も見逃さないようになったから、私は何事に対しても逆らわないというよりはむしろ、もはや何事も悪いように捉えなくなっていた」<sup>1)</sup>。このようにして主体には「自身から過剰に束縛されないための貴重な才能」あるいは「永遠の邂逅を約束する才能」が構成されるという。たしかに同様の才能は大半のジッド的主体（アンドレ・ヴァルテールから『贖金づくり』〔1926年〕のエドゥワールに至るまで）にも認められるだろう。しかし『地の糧』では「詩人の才能」と同一視されることから、作家が自らに具えたいと切望した才能とも考えられる。

同時代の評論家ジュリアン・バンダは、否定的な口ぶりで「デイスポニビリテ」を「ジッドの教義」に結びつけた。『新フランス評論』の寄稿者であり批判者でもあったバンダによれば、この「新しい」思想は「知的な官能主義」<sup>カンシュアリスム</sup>にはかならず、「期待の制限」<sup>アタント</sup>を規定する伝統的な傾向、「フランス式合理主義」「知性」「科学精神」にまっこうから抗するものだという——「デイスポニビリテという教義はこうした〔期待の〕制限の拒否である。逆にそれは全的な期待への意志であり、例外なくあらゆる可能なものを享受しようという、非常に享樂的な決意なのである」<sup>2)</sup>。

バンダの見解は、当時においてジッドの思想が問題視されていた事実を示す

一例だが、「ディスポニビリティ」が精神の受動的かつ可動的な有り様を示すというだけでなく、この語じたいが様々な意義を含みうることにまずは注意しなければならない。とりわけ重要なのは、経済的な語義である。『フランス語宝典』にあるように、「disponibilité」が「ある人が自由に処理できるところの金額」を意味するとすれば、「ディスポニビリティ」を「消費財」として理解しつつ、経済的な文脈に置きなおすことも可能だ。また、この語が示すのは「他者が自由に使えるように供されるべき資産の一部」、あるいは「支払いに際して使われ、ただちに換金される<sup>アクト</sup>資産<sup>ティフ</sup>=借方の全体」でもあり<sup>3)</sup>、したがって「l'objet disponible」を貯蓄され、やがて消費される財と見なすことが許されるであろうし、「l'homme disponible」と言うならば、自分自身を一種の財として捉え、任意の方法で自由に処理できる主体ということになるだろう。

以上のような経済的意義は「ジツド的ディスポニビリティ」にも適用されるべきだろうか。それを最初に指摘したのは、おそらくサルトルである。戦中日記『奇妙な戦争のノート』（1939年11月から1940年3月まで）において、彼は次のように書いている――

バルナブス〔ヴァレリー・ラルポーが1913年に発表した小説『A・O・バルナブス全集』の主人公〕は自らが持つすべての財産を売り払い、そのことを「自らの財を非実体化する」と言う。こうした行為は『背徳者』におけるメナルク、ミシエルの行為から着想されている。ジツド的なのだ。「非実体化する」という語は、私に何ごとかを夢想させた。というも結局において、実際に財の具体的な様態である財産から離れることが問題とされているのであり、財の抽象的な様態、すなわち貨幣のみを保存することがここでの問題なのだ。〔…〕結局、これはジツドによってなされた忠告であり、バルナブスはこれに従ったのだ。現実的所有を象徴的所有に切り替える。不動産財を記号財に変換する。ジツドがディスポニビリティを説くのは偶然ではない。つまるところ、ジツド的な自在人とは自らの資本を自由<sup>ディスポニブル</sup>に処理する能力<sup>ディスポニビリティ</sup>をもった人間のことなのだ。<sup>4)</sup>

サルトルはジツドとラルポーという先輩作家たちを例にとりながら、19世紀末から20世紀初頭にかけての文学における資本主義の進展を考察している。前世代を退けることで自らを別の道へコミットさせてゆく哲学者の企てが容易に読み取れるが、ここで重要なのは、サルトルが1890年以前に生まれた作家たちの「財の非実体化」の傾向を「ジツド的なもの」として捉え、さらにその傾

向を「ジツ的ディスポニビリテ」に同定していることである。1900年生まれの哲学者によれば、「ジツ的ディスポニビリテ」は「資本のディスポニビリテ」にほかならず、「ブルジョワ的な大土地所有」から「資本主義の抽象的所  
有」——「貨幣」ひいては「株券」「小切手」といった一種の紙幣——への移行  
であるという。

こうした移行に、サルトルは「19世紀の有産ブルジョワジーと20世紀の資本主義の間にある移り目」という一種のパラダイム変換を見ている。これが1948年の『文学とは何か』に引き継がれる分析の第1の争点だが、他方で二次的に企図されているのは、ジツのいわば反動的な傾向の告発であり、「ジツ的なもの」の乗り越えであるだろう。サルトルはジツのうちにある「共産主義の魂」を看過したうえで、正反対とも言える「資本主義の精神」をあぶり出し、さらに「ジツ的ディスポニビリテ」は賢者が体現するような無条件のモラルではなく、経済観念から導かれた資本主義者の策略であると喝破するのである。もちろん、ジツが自らの傾向・思想に皮肉な両義性をまとわせることに無自覚であるわけもない。そもそもサルトルのジツ読解は限定的で、後者の特質である多義性を閉却する傾向があり、その後のサルトルの道行きからすれば、ここではすでに「ジツを少しばかり黒く汚して自分自身を白くする」という乗り越えの戦略が密かに着手されていると言えそうだ<sup>5)</sup>。

いずれにせよサルトルの読解のうちで確かなのは、ジツ的ディスポニビリテを資本のそれであるとし、不動産を動産に変換する営為と捉える指摘であろう。ただし、「不動産財」の「記号財」への変換が、自身の財から自由<sup>ディスポニブル</sup>に処理できる部分のみを引き出す営為から派生したという側面は注意すべきだ。つまり土地から貨幣への財の本質的な変化のみならず、全財産から一部分を抽出するいっ  
そう実際のな操作が重要なのであり、サルトルの言う「抽象化<sup>アブストラクション</sup>=抽出」はこうした二重の意味で理解されなければならない。しかも、「抽象化=抽出」はジツの所有観の曖昧さに帰すべきものである。この作家にとって、少なくともマルクス主義への転向以前の彼にとって、所有の否定はすべての完全なる放棄ではなく、財の二分化を意味したからだ。つまり実質的な部分と象徴的な部分に分けたうえで、それぞれを固有の方法で処理するのである。だとすれば、この処理の仕方を問題とすべきではないか。

## 2. ディスポニビリテの実践

ジツ的ディスポニビリテはモラルや存在様式だけでなく、なによりもまず具体的な所有観、いわゆる「所有のセンス」に深く関わってくる。『背徳者』（1902年）の主人公ミシェルは、ひいきの少年が彼の所有品を盗むのをあえて見逃したり、仕事・不動産・家庭を持ちながら自分が何を所有しているのか知らずにいたりするのだが、それらのことを友人のメナルクから一言で断罪されている——「世間でよく言われる〈センス〉というものがあるが、君には〈センス〉が欠けているようだ。〔…〕所有のセンスだ」<sup>6)</sup>。端的に言えば、所有しているにもかかわらず所有している感覚がないということだが、そうした欠落は「現実感の欠如」とともにきわめてジツ的な特質と見なされるべきものであり、場合によっては、所有しているつもりが所有されている、あるいは他者をとおしてでしか所有できない、といった派生的な事態を招くものだ<sup>7)</sup>。

また、「所有のセンス」の欠如は、主体を非所有の欲望へと駆り立てる。たとえば、ミシェルは自分とまったく別の所有観をもつメナルクへの憧憬を口にしていた——「メナルクは何と幸せなのだろう、と私は思った。何も持っていないのだから！ 私は、保存したいから苦しむのだ。結局のところ、そんなことはどうでもいいのではないか」<sup>8)</sup>。ここでミシェルは自分とメナルクとの対立を独占的所有と非所有のそれに帰しているが、事はそれだけでは済まない。むしろ本質的なのは保存と使用の対立である。仮住まいの一人暮らしをつづけるメナルクが高価な布を変色するまで使用したのち、未練なく美術館に寄贈してしまうのに対し、ミシェルは「家具も、布地も、版画もいったん染みがつけば〔…〕すぐに価値が無くなる」と考え、「すべてを保護し、自分ひとりのために鍵をかけてしまっておきたい」と願うからである<sup>9)</sup>。

ここから明らかなように、ジツ的所有には抜きがたい保存の欲求と、使用あるいは広義の意味での消費の欲望が同時に含意されており、後者は非所有願望にすり替わってゆくかぎりにおいて、逆説的な欲望でもある。しかし、こうした欲望にあってこそディスポニビリテ（自らの財産を自由に処理する権利）が行使されると言うべきだろう。そのことを確認するために、『地の糧』のメナルクを召還してみたい。2つの作品にまたがって登場するメナルクは『地の糧』において、「脱所有の倫理」を説き、倫理を行動に移したときのことを次のように語っている——

50歳のとき、その時が来て、私はすべてを売り払ったのだ。私の趣味は確かなもので、それぞれの品物に対する知識もあったから、私が所有していたもので価値を増していないものは何ひとつなかった。私は2日間で莫大な財を現金に換えた。この大金をすべて貯蓄<sup>たせ</sup>して、いつまでも自由に使用できるようにした。私は完全に何もかも売ってしまったのである。この地上で個人的なものは何ひとつ、わずかな昔日の思い出さえも、取って置きたくなかったから。<sup>10)</sup>

財の売却によってメナルクは、自由にできる多額の現金を獲得し、あらゆる個人的な所有（物）を破壊したいという自らの欲望を満たす。しかし、注意しなければならないのは、彼がここで経済的な操作（現金化・投機・貯蓄・運用）と「脱所有」を混同している点である。このような混同というか矛盾は、ジッドの生前から非難の対象となっていた。1930年代にジッドと同じく共産主義のシンパであったジェフ・ラストが最初だと思われるが、彼の批判の内容については、ジッド自身が『日記』のなかで弁解をまじえつつ紹介している――

ジェフ・ラストはメナルクの倫理を非難する。もつともだ。私自身、その倫理を認めてはいない。当時すでに、留保<sup>スレゼルヴ</sup>つきでしかそれを提示せず、責任を他人に背負わせるように配慮したものだ。たしかにそうなのだ。しかし、[その倫理に対する]私の部分的な反対はほとんど感じ取れないほどであるし、私がいくつかの文中に込めたつもりのおぼろげな皮肉も（「絵画について知識があったので、きわめて安価で手に入れることのできた画幅」）さほど際立っていない。メナルクの肖像は『背徳者』のほうがかうまく描けているのだ。『地の糧』においては、いくつかの点で私の肖像とごっちゃになっていて、私の方針を歪曲しかねないし、あの作品のなかでより尊ぶべき点である「脱所有の弁護」に反しているところがある。<sup>11)</sup>

ラストの批判は、先述のメナルクの行動が『地の糧』全体を貫く「脱所有の倫理」にそぐわないというものであったらしい。つづけてラストはこの作中人物と作者ジッドの「詭弁」、あるいは彼らのうちに残存するブルジョワ精神を非難したということなのだが、こうした読解はマルクス主義的批評の典型でしかないとしても、ジッド的傾向の本質を突いている。すなわち「貯蓄＝保留 *r  serve*」の傾向である。ひとつは、貯蓄しつつ運用するという両義的な傾向であり（『地の糧』の引用中の「貯蓄する＝投資する *placer*」という動詞に注目）、これはジッドが皮肉を込めたというメナルクの投機的な行動によって表象されている（ただし、「絵画について知識があったので、きわめて安価で手に入れる

ことのできた画幅」という引用は、『地の糧』本文の字句を若干改変している)。もうひとつは、一切の結論を控え、自らが打ち出す思想に対しつねにニュアンスを加えるという、すべてのジッド作品に共通する傾向のことである。

いずれにしても「脱所有の倫理」は、ジッド的主体を財の放棄へと向かわせるはずでありながら、実際には「資本のディスポニビリティ」と密接に通じている。これがいわゆる「ジッド的ディスポニビリティ」にほかならず、サルトルが「現実的所有を象徴的所有に切り替える」と定義した傾向なのである。ちなみにサルトルは、メナルク——『背徳者』ではなく、むしろ『地の糧』のメナルクを挙げるべきだったが——とミシュルのほかにジッド的ディスポニビリティを体现する人物として、『放蕩息子の帰宅』の父子、『地の糧』の語り手、そして「ある時は旅人、ある時はキュヴェルヴィルの質素な共同体の長」であったジッド本人を挙げていた<sup>12)</sup>。

『放蕩息子の帰宅』(1907年)については、サルトルと別の視点から以下のことを指摘しておきたい<sup>13)</sup>。この作品では動産と不動産という2つの財が峻別されている。主人公の放蕩息子が「〔彼の〕資産のうち持って行けるものをすべて持ち去った」のは、それらを「消費」し、「様々な快樂に換える」ためであったが、他方で、「〔彼が〕浪費しなかった財産」は締めり屋の兄によって取り置きされていた。兄によれば、保管された財産は「我々みんなに共通の取り分」、すなわち「不動産」であり、これとは別に、父がもたらすはずの「特別の贈与分」にかんする個別の所有権を兄は弟に知らせる。放蕩息子と呼ばれる弟は「それしか所有したくない」と今さらながらに言うのだが、この特別の取り分こそ、身につけて持って行ける財産、つまり浪費に当てられるべき財産として初めからあったものなのである<sup>14)</sup>。ジッド的ディスポニビリティの機制はこうした家計においてよく働いている。重ねて言えば、それは全財産を共有の不動産と私有の動産に二分し、一方を貯蓄に他方を消費に当てようとする行為であり、ジッド的主体にとっては、自らの所有物から一定の部分を抽出する、あるいは固定資産から現金を引き出すという意味で、二重の「抽象化」なのである。

以上、サルトルに依りながらジッド的ディスポニビリティの経済的側面(財の二分化と象徴化)を考察した結果、もはや所有だけでなく、対象物の把持の仕方が問題であることが明らかになったと思う。また、サルトルが「ジッド的<sup>ディスポニブル</sup>自在人とは、自らの資本を自由に<sup>ディスポニビリティ</sup>処理する能力をもった人間のことであり」と

言うとき、「ディスポニブル」がそもそも主体にもかかる形容詞であるのに改めて気づかされる。それは柔軟で経済的にも自由な個人のイメージを喚起するが、ここから想定できるのは、ディスポニビリティという概念が「自我」を対象にしても適用されたのではないかという問いだ。というのも、ジッドは自我を自由に操作可能な資本と見なしているふしがあるからである。

### 3. 自我のディスポニビリティ、あるいは投機

では、自我のディスポニビリティとは何か。検討に入る前に急いで指摘しておきたいのは、問題となるのが精神のディスポニビリティだけでなく、身体ディスポニビリティのそれでもあるということだ。『地の糧』には次のようにある——「肉体の自由自在ディスポニビリティさ。肉体には細かい孔あなが穿たれ、あらゆるものがあまりに甘美なかたちで侵入してくるようだ<sup>15)</sup>。「多孔質の肉体」という表現からもわかるとおり、ディスポニビリティはそもそも自分自身の身体の表面に内と外とを相互交通させる「孔」を穿つことなのである。『地の糧』の語り手はこう述べている——

自由自在！ ナタナエルよ、自由自在なのだ！

——すべての感覚を急激に、同時に張りつめることで（言い表すのが難しいのだが）、自らの生の感覚じたいから、ついに外界との全接触の集中した感覚をつくり出すこと……（あるいはその逆も）——私はそこにいる。そこでこの穴を占めている。穴から入ってくるのは、

耳のなかには、絶え間ない水のせせらぎのあの音、あの松林の間を吹き抜ける、しだいに大きくなり、やがて静かになる風の音、きれぎれに聞こえてくる蝗の羽音など。

目のなかには、小川のなかにきらめくあの太陽の光、あの松の木々の動き […] ……あの苔に穴を穿つ私の片足の動きなど。

肉のなかには、（感覚として）あの湿気、あの苔の柔らかさ […]、手のなかに包まれた私の額、額にあてる私の手など。

鼻のなかには、…（しっ、リスが近づいてきた）など。<sup>16)</sup>

外界の要素が「穴」をつうじて身体に侵入し、内的な感覚と溶け合わさってゆくわけだが、語り手によれば、「これらすべてをもちも一つの小さな包みのなかに」まとめてしまうことがディスポニビリティの眼目だという。しかしジッド的主体である語り手は、「包み」を「生」に同定しつつ、そこには「つねに他のものがさらにある」ことも仄めかす。「それじゃあ、君は私が様々な感覚の溜



まり場にすぎないと思っているのか？——私の生はつねに、私以上のそれなのである」。ここでまず留意すべきは、大文字で強調された「それ CELA」がジッドにおいては特別な代名詞である点だ。『パリュード』（1895年）の有名な序文では次のように書かれている。作者が気づかずに作品のなかに置くものはつねに「それ以上のもの plus que CELA」であり、これは「神の取り分」あるいは「無意識の部分」と見なされるべきものだが、いずれにせよ「作品の価値が上がれば上がるほど、書き手の取り分は小さくなり、神の受け入れの度合いが大きくなる」かぎりにおいて、作者は「いたる所から物事の啓示を、読者から作品の啓示を期待」しようとする<sup>17)</sup>。話題とされているのはいわば「作品」のディスポニビリティであるが、「自我」においても事情は同じである。絶対的他者であれアルター・エゴであれ、他者の取り分を受容することでしか、自我は「それ以上のもの」（先の引用で言えば、別のものとしての「それ」）を獲得することはできないというわけだ。

つまり、ディスポニビリティによってジッド的自我は「それ以上のもの」になり価値を増すことができる。ここにはメナルクが所有物売却の際に密に行った投機と同じ操作が認められるのではないか。そもそもディスポニブルな主体においては、一切の制限の放棄があらゆる可能なものへの期待によって動機づけられており、この期待は『地の糧』において「よき公式」とされた「可能な限りの人間性を引き受ける」意志となる<sup>18)</sup>。『背徳者』の主人公が言うように、「〔彼が〕以前に持っていた非常に堅固で限定的なモラル」を放棄することで、主体は「生の増大と再びの高揚」を得ることができるのだ<sup>19)</sup>。このようにマイナスをプラスに転じることは、ブルジョワ的な経済原理に反するが、ジッドが親しんだ福音書のモラル、「〔自らの生、自らの魂を〕放棄する者は、それを実に生き生きとしたものにするだろう」<sup>20)</sup>には適うということも指摘しておこう。

ところで、こういった一見矛盾した操作を実践する主体として、1898年に発表された戯曲『フィロクテート』の主人公をぜひとも挙げておきたい。彼はまさにその操作を「投機」と名指しているからだ。孤島においてただ独り暮らすうち、「行為の動機を求める才能をなくし」たフィロクテートは、次のような状況に陥ることを自らに許してしまう——

依然として生きつづけながらも、まもなく私はすっかり抽象的になってしまうだろう。ユリスよ、寒さが身内に入り込んできて、いまや私は恐怖におびえている。なぜなら私はそこに、つまりその厳密さじたいのうちに、美しさを見出しているからだ。〔…〕ユリスよ、ここでは何もものも生成することがないのだ。あらゆるものが存在し、存在しつづける。ついには、ここで投機することができるのだ！——私は死んだ小鳥を保存しておいた。ほら、これがそうだ。冷たすぎる空気にさらされているおかげで、永遠に腐ることがないのだ。そしてユリスよ、私の行為、私の言葉は凍りついたようになり、永遠のものとして、まるで据えられた岩の環のように、私の周りを取り囲んでいる。毎日、それらがそこにあることを確認していると、あらゆる情念が黙り込んでしまい、真実がなおいっそう堅固になるのを感じるのだ——そして、それと同様に自分の行動もまたなおいっそう堅固に、美しくなつてほしいと私は望んでいる。そうだ、この明るい霜の結晶のように、本物で、純粹で、透明で、ひたすらに美しくなつてほしいのだ。この結晶のなかに太陽が姿を見せるとしたら、太陽全体が結晶をとおして現れるだろう。私はゼウスの光明をわずかでも妨げたくはないのだ。ゼウスがブリズムのごとく私のうちに浸透せんことを、そして、その屈折した光が私の行為を神々しいものにせんことを。〔傍点引用者〕<sup>21)</sup>

フィロクテートは自らの「行動」「言葉」「思想」を無人の市場のなかに「投機」し純化することで、「最高に透明な状態に到達し、自らの不透明さを消去するまでにいた」ろうとする。彼の「投機」はまったく自給自足のシステムにおいて展開されているように見えるが、実際はもろもろの外界の要素とそれらが喚起する様々な感覚を取り入れることによって発動されているのであり、これらすべてを抽象的で透過性のある身体のなかに投げ込むという所作は、先に見た『地の糧』の語り手の指針を忠実になぞるものだ。

こうした自己の価値づけは、保存と投資の原理に基づきながら、上述の抽象的所有を前提とするものである。『フィロクテート』を一度ならず引用したサルトルは、主人公のうちに「ジツ的自在人」の典型的な肖像を見ていたにちがいない。純粹で絶対的な個人主義に拘泥していたフィロクテートは、最終的に自らが所有する「弓と矢」を他者に譲渡する決心をするが、それはサルトルが『存在と無』（1944年）において指摘したような「純粹性」から「本来性」への「転向」を意味するよりもまず<sup>22)</sup>、投機という利殖を目的とした操作から贈与という無償の行為への移行として捉えるべきものである。したがってフィロクテートはメナルクが辿ったのと同じプロセスに巻き込まれているわけだが（前述したように、『背徳者』では「脱所有の倫理」に適うかたちで寄贈を行ってい

た)、前者が行う投機にも、後者のそれと同じくジツドの皮肉が込められていると解釈することもできるだろう。

そもそもジツドは投機という行為をどのように捉えていたのか。友人たちの影響もあって株式取引に関心のあったジツドは、他方でこのユダヤ的な金儲け主義の営為を批判してもいた。彼は自身の文学が何かに乗じる投機的なものに見なされるのを嫌がり<sup>23)</sup>、『日記』に「恐ろしい悪夢」として次のような夢を記している——「ユダヤ人たちによって征服され、株式市場のモデルにしたがって再建されたオデオンには、もはや金融にたずさわる人々しか収容しておらず、彼らは文学や芸術を自分たちの投機の対象に仕立てあげていた」<sup>24)</sup>。

しかし利殖を当て込む営為を忌み嫌っていたとしても、創作においては投機概念を巧みに採り入れていたのではないか。フランソワ・ダゴニェが解説するように、「投機という語は哲学と金融に共通して」あり、この「2つの領域においては、所与のものを超えて自らを高め、データを集積したうえで、未来を予想し、未来を構築することさえできると信じられている」<sup>25)</sup>。たとえば、ジツドが初期から駆使し、ある意味で理論化した「中心紋 *mise en abyme*」という技法は、明らかにそのような投機的な効果を当て込んだものである。メモリンクやヴェラスケスなどの絵画に見られるような「小さな凸面の鏡」のイメージに依りながら、作家はこの効果を例証したわけだが、言うまでもなく、そこでの「鏡」は「投機 *spéculation*」の語源でもある「*spéculum*」と同定できるものだ。このような鏡を作品のなかに据えることによって、作品は「主体〔主題〕が主体〔主題〕そのものに及ぼす遡及効果」を被ることができるとし、そこでの「行為主体が自己である」かぎり、そして「遡及効果をもたらす物が〔…〕想像された主体」であるかぎりにおいて、中心紋は「自分自身に対する間接的作用の方法」にはかならないという（«*sujet*»という語の二重の意味に注意しよう）<sup>26)</sup>。つまり作者が二次的な主体をつくり出すとき、この主体は遡及効果によって作者に一定の影響をもたらすのであって、その影響はいわば所与の主体が付加価値を獲得するのに寄与するのである。

見方を変えるならば、この作家にとって作中人物の造成もまた自我を元手にした投機と言えるのかもしれない。じっさい『日記』その他のテキストにおいて、ジツドは古い自我を乗り越えるために、身内に住まう分身を外へと解き放ち、それに生を貸し与えたうえで、新しい主体との取引を演出する（分裂症的

な自己の在り方としては珍しくないが、ジッドが特殊なのは、これを主体が行う一連の操作として我々に見せるところだ<sup>27)</sup>。作者が仮構された第二の主体と連帯関係を結び、やがて同化するまでになるのは、この主体の導きによって、自分ひとりで赴く地点より遠くへ進むためだというのが、ここに見られる抽象化＝二分化された自我の運用は、単に創作原理に帰すべきものというよりは、自我のエコノミーあるいはガヴァナンスの働きと見なすべきものだろう。いずれにせよ、こうしたジッドの傾向こそフィロクテートの投機が表象したものであり、サルトルが提示した20世紀型資本主義のカテゴリーに改めて組み入れられるだろう。

#### 4. 「抽象的人間」の肖像

サルトルはジッド的ディスポニビリティのうちに財の「抽象化」の手続きを取取し、その操作が不動産から記号的な貨幣への形態的転換であることを見抜いたうえで、先輩作家ジッド（あるいはジッド世代）の資本主義者としての肖像を提示した。しかし我々が見るところ、抽象的所有あるいは財の抽象化とは（自我＝財も含め）、まず財を2つに分裂させることにある。そして一方を貯蓄へ、他方を消費へまわすわけで、要するにこれらを「運用する placer」ということである（「貯蓄」と「投資」という二重の意味を含んだ「運用」）。じじつ、互いに対立するように見える貯蓄と消費が表裏一体であることは、メナルクやフィロクテートの投機行為のうちに示されている。前者は無償＝無利子の贈与あるいは完全なる脱所有を志向しつつ、密かに利益を当て込んだ売却を行い、後者は純粹で利害から離れた自我の保存を試みながら、そこに投機的な価値づけを目論んでいた。ジッドは一見無償に見える彼らの行為を皮肉として描いたようだが、それでもここには経済性と反経済性の連動した状況が見られるように思う。なぜなら、財の2つの処理法を許すジッド的ディスポニビリティには、サルトルの指摘したベル・エポックに特徴的な民主主義的資本主義だけでなく、財の放棄という原義的なコミュニズムと、資本を扱うという意味でのキャピタリズムとの折衷を認めることができるからだ。

最後に「抽象的人間」という概念について触れておきたい。すでに見たとおり、サルトルは1869年生まれのジッド、1881年生まれの「まったくジッド的な」ラルボーを「民主主義陣営の抽象的人間」の肖像に仕立てあげ、これを退

けたうえで、「具体的人間」という新しい肖像の到来を祝福した<sup>28)</sup>。明らかにサルトルはこの新しい人間像に自己を投影しているわけだが、それでも『ノート』の別の場所で次のように告白しているのを見逃してはならない——

たしかに私は資本主義・議会主義・中央集権体制・官僚主義によって産み出された怪物なのだ。[...] 一斉に得られたこれらの抽象化のせいで、私は抽象的な存在となり、根無し草になっている。[...] 私は何ものとも連帯せず、自分自身とさえ連帯することがない。誰も必要とせず、何も必要としていないのだ。34年の人生の間に私が自らつくり上げた人物とは、このようなものである。まさしく、ナチス党員が言うところの「金権民主主義陣営の抽象的人間」だ。<sup>29)</sup>

サルトルは自身が否定したはずの前世代、すなわち資本主義的で民主主義的な抽象性を標榜するジッド世代にじつは自らも属していることを意識している。そもそも彼のジッドに対する態度は乗り越えへの意志と共感がないまぜになったものだが、それよりもここでは彼が件の「抽象的人間」をデラシネ・非連帯者・反ファシストと形容しているのに注目しよう。というのも、それらはことごとくジッドの肖像だからだ<sup>30)</sup>。では、なぜサルトルは『贖金づくり』の主人公に言及しなかったのか。小説家エドゥワールほど、ジッド自身、すなわち「抽象的人間」を体現している作中人物はいないのだから——

彼の頭脳は、易きに流されてしまうと、たちまち抽象の世界に落ち込み、そこでのびのびとはしゃぎまわった。為替相場・平価切り下げ・インフレといった概念が、カーライルの『サーター・リザータス』の衣装理論のように、少しずつ彼の作品を浸食しはじめていた——それらの概念が作中人物たちの居場所を奪っていたのだ。<sup>31)</sup>

同時代の経済状況に対するジッドの洞察が窺える箇所だが、ここにはジッドの主体のディスポニブルな状況がよく描かれている。主体は外部から来る様々な「概念」が身体（「頭脳」）および「作品」に侵入するのを許し、それらの「概念」を「作中人物」という仮構の主体＝主題に仕立てあげながら、自らが理想とする「小説」の制作を企図する。この第2の主体＝主題は中心紋の作用によって、所与の主体、つまり自我の価値づけに動員されるわけだが、ここでのジッドの皮肉は明白かつ強烈なものだ。つまりエドゥワールが書こうとする小説の題がいみじくも「贖金づくり」であり、しかも「為替相場」「平価切り下げ」「インフレ」という概念はことごとく投機に関わるものにはかならず、あ

る意味で投機＝価値づけの失敗を予示してもいるからである（じじつエドゥワールは、このほとんど投機的な小説を書けずに終わる）。フィロクテートによれば、抽象の世界にコミットすることは自らを抽象化するだけでなく、自らの言葉や行動、真実を純化することであったが、そのことを念頭に置くならば、『贗金づくり』の主人公にとって、「純粹小説」の執筆が「小説から特に小説固有でない要素すべてを取り除く」<sup>32)</sup> 試みであったことの意義に改めて思いいたる。それは自らの財、あえて言えば、小説という財からのディスポニブルな部分の抽出なのだ（上の引用での「作品」と「身体」のアナロジーに注目しよう）。まさしくフィロクテート＝エドゥワールの系譜は、世紀末から兩次大戦間まで一貫して続いたジツ的ディスポニビリテを証明しているのである。

## 註

- 1) *Les Nourritures Terrestres*, in André GIDE, *Romans et Récits. Œuvres lyriques et dramatiques*, vol. 1 [abrégé ensuite : *RR1*], Paris : Gallimard, coll. «Bibliothèque de la Pléiade», 2009, p. 381.
- 2) Julien BENDA, *La France byzantine ou le triomphe de la littérature pure*, Paris : Gallimard, 1945, pp. 32-33. バンダはジツの『プレテクト』(正確には1899年の「アンジェールへの手紙」)の一節を引用している——「明確な思想は最も危険なものである。なぜなら、そこではもはや思想をあえて変えようということがないからだ。ある意味でこれは死の先取りである」(«Lettre à Angèle [IX]», in André GIDE, *Essais critiques* [abrégé ensuite : *EC*], Paris : Gallimard, coll. «Bibliothèque de la Pléiade», 1999, p. 56)。つまり「不変の原理と死んだ原理を同一視する」ということだとしながら、バンダはここに「フランス式合理主義に反対する思想」を読み取っている。
- 3) *Le Trésor de la langue française informatisé* [page de la définition de «disponibilité»] : <<http://atilf.atilf.fr/>>.
- 4) Jean-Paul SARTRE, *Carnets de la drôle de guerre*, in *Les Mots et autres écrits autobiographiques*, Paris : Gallimard, coll. «Bibliothèque de la Pléiade», 2010, p. 426.
- 5) Pierre MASSON, «Sartre lecteur de Gide : authenticité et engagement», in *Lectures de Sartre*, Lyon : Presses universitaires de Lyon, 1986, pp. 224-230. サルトルのうちに潜む「ジツ主義」については次も参照——SARTRE, *Cahier Lutèce* (1954), in *Les Mots et autres écrits autobiographiques, op. cit.*, pp. 929 et 933.
- 6) *L'Immoraliste*, *RR1*, pp. 622-650.

- 7) Voir *ibid.*, p. 656 ; *Le Roi Candaule* (1899), *RR1*, pp. 539-540.
- 8) *L'Immoraliste*, *RR1*, p. 652.
- 9) *Ibid.*, p. 648.
- 10) *Les Nourritures terrestres*, *RR1*, p. 385.
- 11) André GIDE, *Journal II, 1926-1950* [abrégé ensuite : *J2*] Paris : Gallimard, coll. «Bibliothèque de la Pléiade», 1997, p. 489 (24 mars 1935). メナルクの「投機」については、ジャン＝ジョゼフ・グーの分析も参照—— Jean-Joseph GOUX, *Frivolité de la valeur. Essai sur l'imaginaire du capitalisme*, Paris : Blusson, 2000, pp. 45-70.
- 12) キュヴェルヴィルというのはサルトルの勘違いで、正しくはジッドが1896年5月から4年間村長をつとめたラ・ロック＝ベニヤール。
- 13) 『放蕩息子の帰宅』の父子の系統に注目しつつ、そこに『地の糧』で説かれた公式「ナタナエルよ、神は至るところにいるのだから、そこよりほかを探してはいけない」の適用を見ながら、サルトルはジッドの「象徴的所有」を例証している (SARTRE, *Carnets de la drôle de guerre, op. cit.*, p. 426)。
- 14) *Le Retour de l'enfant prodigue*, *RR1*, pp. 782 et 785-786.
- 15) *Les Nourritures terrestres*, *RR1*, p. 416.
- 16) *Ibid.*, pp. 420-421.
- 17) Préface à *Paludes*, *RR1*, p. 259.
- 18) *Les Nourritures terrestres*, *RR1*, p. 355.
- 19) *L'Immoraliste*, *RR1*, p. 622.
- 20) «De l'influence en littérature» (1900), *EC*, p. 410 ; *Numquid et tu...?* (1922), in André GIDE, *Journal I 1897-1925* [abrégé ensuite : *J1*], Paris : Gallimard, coll. «Bibliothèque de la Pléiade», 1996, p. 994.
- 21) *Philoctète*, *RR1*, p. 456.
- 22) サルトルによれば、ジッドのフィロクテートは物語の終局にいたって「解放的な瞬間」、すなわち「転向 conversion」を経験したのであり、この「転向」により、彼は「自らの当初の投機」を一変させ、「自らの存在理由と存在」を変容させることになったという (*L'Être et le néant. Essai d'ontologie phénoménologique*, Paris : Gallimard, 1979, p. 532)。
- 23) Voir par exemple *J1*, p. 585 (15 janvier 1908).
- 24) «Journal sans dates» (décembre 1910), *EC*, pp. 259-260.
- 25) François DAGOGNET, *L'Argent. Philosophie déroutante de la monnaie*, Paris : Les Belles Lettres, coll. «Encre marine», 2011, p. 82.
- 26) *J1*, pp. 170-172 (septembre 1893).
- 27) Voir *J2*, p. 202 (30 mai 1930). ジッドとアルター・エゴとの取引については、次の拙稿を参照されたい—— «Le symbole "X" dans le *Journal* de Gide», 『早稲田大学大学院文学研究科紀要』第56輯、第2分冊、2011年2月、117-130頁。
- 28) SARTRE, *Carnets de la drôle de guerre, op. cit.*, pp. 428-432.

- 29) *Ibid.*, p. 581.
- 30) 「反ファシスト」というのは、1930年代の作家のアンガージュマンを見れば自明のことだが、「デラシネ」と「非連帯者」にかんしては次の拙稿を参照されたい——  
«La question de l' "association" dans *L'Immoraliste* de Gide», 『フランス語フランス文学研究』第106号, 日本フランス語フランス文学会, 2015年3月, 71-88頁。
- 31) *Les Faux-monnayeurs*, in André GIDE, *Romans et Récits. Œuvres lyriques et dramatiques*, vol. 2, Paris : Gallimard, coll. «Bibliothèque de la Pléiade», 2009, p. 316.
- 32) *Ibid.*, p. 227.